

仮装巡洋艦を提唱した寺島成信

柴崎 力栄

知的財産学部 知的財産学科
(2010年5月31日受理)

TERASHIMA Shigenobu, An Advocate of Auxiliary Cruiser
by
Rikiei SHIBASAKI
Department of Intellectual Property,
Faculty of Intellectual Property
(Manuscript received May 31, 2010)

Abstract

TERASHIMA Shigenobu (寺島成信) began to be an advocate of auxiliary cruisers (仮装巡洋艦) when joining the navy as a civilian in 1890. It was the year in which the first session of the National Diet convened. He wrote pamphlets aiming at gaining support for naval expenditure. His point was the simultaneous buildup of an ordinary fleet of warships and auxiliary cruisers. Japanese naval power at the time of the Russo-Japanese War in 1904-1905 was the completion of his earlier advocacy. In 1897, he was invited to join Nippon Yusen Kaisya (日本郵船会社) as an executive. The company had a fleet of merchantmen contracted with the government in advance to be laid under requisition during a war. His 1923 doctoral dissertation was the first analysis about the making of merchant marine policy in Japan and its relationship with war.

キーワード； 海軍編修書記，日本郵船，日露戦争，仮装巡洋艦，海上権力

Keyword ; Navy, NYK Line, Russo-Japanese War, Auxiliary cruisers, Sea Power

1. はじめに

本号に掲載した別の研究ノート「海軍少将から代議士に転じた井上敏夫」冒頭で述べたように、明治時代から大正初期、海洋国家日本の成立に関わった人物を列伝風に描くことを試みている。先に『近現代日本人物史料情報辞典4』（吉川弘文館、平成22年11月刊予定）に、肝付兼行（海軍水路部長、海軍中将）、井上敏夫、寺島成信の項を執筆した。このうち井上と寺島について、辞典では省いた論証部分を本号で提示する。二人は活動領域が異なり検索キーワードも別なので、別稿とした。

寺島は明治2年（1869年）庄内鶴岡藩士の家に生れ、慶應義塾を卒業後、明治23年（1890年）、同大学部を中退して海軍編修書記となった。明治26年（1893年）日本経済会の懸賞論文「日本海運論」に1位入賞し、明治30年（1897年）、近藤廉平に招聘され日本郵船に移った。初期議会から日露戦争までの間、戦時に仮装巡洋艦として用いる高速商船の建造、航路補助政策を提唱した。日本郵船では調査部門を創設し、大正12年（1923年）、東京帝国大学から初の経済学博士号を授与された。第1次大戦中より論壇に登場し、民間の海運・航空を含む交通政策を軍事との関連で論じた。寺島に言及した先行研究はまだない。筆者は、平成21年2月刊『大阪工業大学紀要人文社会篇53-2』に「寺島成信「海運政策」講義」と題し、大正12年（1923年）海軍経理学校での講義筆記録『海運政策』を全文翻刻した。

以下、出典註や史料紹介を交えつつ寺島の前半生を概観し、前記辞典の補遺とする。

2. 自筆履歴書

人物研究では遺族やご子孫の手元に残された個人記録を参照するのが最も望ましい形である。しかし、寺島についてその所在は確認できていない。明治維新以降の個人文書を扱う国立国会図書館憲政資料室が所蔵する他の人物の関係文書に、寺島が当該

人物に宛てて発信した書翰は残らない。唯一存在が確認できたのは、防衛省防衛研究所所蔵の簿冊「明治二十三年 職員進退録 巻五」に綴じ込まれて残る自筆履歴書 および 現在は福澤研究センター編『慶應義塾入社帳』（慶應義塾、昭和61年）として刊行されている慶應義塾に残る入学記録である。前者は個人情報に該当するため現在のところ、国立公文書館がインターネット上に開設した「アジア歴史資料センター」経由での公開対象外である。海軍に奉職するまでの経歴について、後段で紹介する公刊資料にはやや誤伝が含まれ相互に矛盾する個所も見られるので、自筆履歴書が残ったことは貴重である。まず履歴書の全文を掲げる。以下、引用文中での「寺島」と「寺嶋」の区別は原史料通りとする。

履歴書

山形県土族

寺嶋成信

明治二年七月生

- 一 明治十五年四月高等小学科卒業
山形県朝陽小学校
- 一 明治十九年五月高等小学訓導免許状ヲ授与ス
山形県
- 一 明治十九年七月中学全科卒業
山形県中学校
- 一 明治二十一年九月慶應義塾童子寮室長ヲ托ス
東京慶應義塾
- 一 明治二十二年四月慶應義塾正科卒業
東京慶應義塾
- 一 明治二十二年二月ヨリ八月マテ英人サンマー氏並ニブラック夫人ニ就テ外国語専究ス
- 一 明治二十二年八月ヨリ東京専門学校校外生ト為リ司法科政治科講究ス
- 一 明治二十二年八月十九日臨時編纂ノ件ヲ囑托ス但シ日給壹円ヲ給ス
海軍参謀部
- 一 明治二十三年一月卅一日臨時編纂ノ囑托ヲ解ク
海軍参謀部

- 一 明治二十三年二月四日翻訳生ヲ命ス
但シ日額壱円五拾銭ヲ給ス
海軍参謀部
明治二十三年四月十一日翻訳生ヲ解ク
海軍参謀部
明治二十三年四月十二日当部臨時編纂ノ件ヲ囑
托ス
但シ謝金トシテ月額金三十五円ヲ給ス
海軍参謀部

明治二年七月生
高等小学全科卒業候事
明治十五年四月二十五日
 - 一 参謀部出勤以来清国海軍ニ係ル歴史，条例及地
誌ノ編纂並ニ英書ノ翻訳ニ従事ス

山形県朝陽小学校
免許状
山形県士族
寺島成信
明治二年七月生
 - 一 明治十四年十月学術進歩試業優等ノ為メ扇子ヲ
褒賜ス

山形県
卒業証書
山形県士族
寺島成信
明治二年七月生
 - 一 同十五年四月学術進歩試業優等ノ為メ扇子ヲ褒
賜ス

山形県
制規ノ中学全科卒業ニ付卒業証書ヲ授与ス
明治十九年七月十九日
 - 一 同十六年十二月品行方正学業進歩ノ段奇特ニ付
日本蒙求一部ヲ褒賜ス

山形県
山形県中学校長
俣野景次
 - 一 同十七年七月試業優等ニ付一等賞品ヲ褒賜ス

山形県中学校
卒業証書
山形県士族
寺嶋成信
 - 一 同十七年八月試業優秀奇特ニ付地理書壱部ヲ褒
賜ス

山形県
右八本塾制定ノ学科ヲ履修シ成規ノ試業完了セルヲ
以テ此卒業証書ヲ授与スルモノ也
明治二十二年四月二十五日
慶應義塾
社頭 福澤諭吉
塾長 小泉信吉
試業主任 門野幾之進
 - 一 同十八年七月試業優等ニ付一等賞品ヲ褒賜ス

山形県中学校
 - 一 同十八年十一月学業進歩ノ段奇特ニ付英和字典
壱部ヲ褒賜ス

山形県
 - 一 同十九年七月入校以来篤志勉学品行端正ニ付一
等賞品ヲ特賜ス

山形県中学校
- 卒業証書
山形県士族
寺嶋成信

引用中に登場する寺島が西田川郡中学校（現在の山形県立鶴岡南高等学校の前身）を卒業した時の校長，俣野景次は，鶴岡生れの慶應義塾出身者であり，『慶應義塾入社帳3』415頁によれば，明治20年（1887

年) 9月20日, 寺島が慶應義塾に入る際には保証人の意味の「証人」となっている。

なお『慶應義塾入社帳5』318頁に掲載された「大学部入社帳」にも寺島の名前が残る。明治23年(1891年)1月の大学部発足時に入学したが, 実質的に勉学する期間は短く, 同年6月に, 海軍編修書記に転じたと推測される。前掲・防衛研究所所蔵「明治二十三年 職員進退録 巻五」には, 同6月30日付で「海軍編修書記見習」を命ずる書類が残り, 自筆履歴書はその添付文書であった。

翌明治24年(1891年)3月27日, 見習が外れて海軍編修書記となった。防衛研究所所蔵「明治二十四年 職員進退録 巻四」に残る「編修書記見習寺島外二名任官ノ件」が当該記録である。

3. 人名辞典

公刊された寺島に関する記述のある刊行物を発行順に列挙すると, つぎのようになる。なお, 寺島の伝記は編纂されていない。

1. 桑村常之助著『財界の実力』金桜堂, 明治44(1911年)
2. 古林亀治郎編『実業家人名辞典』東京実業通信社, 明治44年(1911年)
3. 今田醒民編『山形県名家録』山形名家録編纂局, 大正11年(1922年)
4. 報知新聞社通信部編『名士の少年時代 東北編』平凡社, 昭和5年(1930年)
5. 鶴岡市編『鶴岡市史 下』鶴岡市, 昭和50年(1975年)
6. 長南寿一編『庄内文化芸術名鑑』六兵衛館, 昭和57年(1982年)
7. 『新編庄内人名辞典』昭和61年(1986年)

寺島の生涯全般については「7.」が概観を示し, 前半生については「2.」が詳しい。上京にいたる経緯は「4.」が詳しい。

「4.」『名士の少年時代 東北編』は, 中学卒業後に学費が工面できないため, 志を懐きながらも郷里

で小学校訓導をしていた寺島に学費提供を申し出たのは地元の銘酒「加茂川」の醸造元・加藤長三郎(通称「加茂長」)であったと記す。同320頁には,

明治十九年九月、成信は一切の上京準備が整ふと、人力車に乗つて生家から福島県の二本松に向つた。両親や恩人の加茂長さん、その他大勢の知己朋友に見送られながら……

そして二本松から汽車に乗つて東京に出て、慶應義塾にはいつたのである。

との記述がある。福島県白河以北, 仙台にいたる日本鉄道線が開通したのは明治20年(1887年)であり, 鉄道で上京したとの記憶が正しければ, 明治20年でなければならない。「明治十九年」とあるのは, 昭和初期に取材に訪れた報知新聞記者のインタビューに応じた際, 記憶違いのまま答えたために生じた年代のずれであろう。『日本国有鉄道百年史2』(日本国有鉄道, 昭和45年)によると, 明治20年7月16日に白河から郡山まで, 同12月15日に郡山から福島を経て仙台にいたる区間が開通した。二本松は郡山と福島の中間地点であり, 同書443頁に「郡山・福島間は9月16日に軌条敷設を終わり」と記されている。その直後, 二本松・郡山間のみが仮開通していた時期に, 寺島が二本松から汽車に搭乗して東京に向かい, 『慶應義塾入社帳』に記録された9月20日に慶應義塾に入学手続きを行ったと推測される。

「7.」『新編庄内人名辞典』は明治「25年(1892)佐藤雄能らと謀って在京学生寄宿舎を設立ために奔走する。」と青年時代の経歴を述べる。在京学生寄宿舎については「5.」に詳細な記述がある。さらに「7.」は「晩年は郷里に帰って湯野浜で病氣療養し, 71歳のとき同地で没した。」と晩年について他にない情報を記す。

「2.」の『実業家人名辞典』は, 明治末にいたる経歴をつぎのように記す。

君は羽前旧庄内藩士、明治二年七月を以て同藩鶴岡に生る、厳君を成則氏と称し、君は其三男、幼にして穎悟、学を好んで文を能くす、郷間の異数とする所たり、夙に東京に出て慶應義塾に

学び、明治二十二年其業を卒ゆるや、程なく海軍参謀部編纂課に入り、列国海軍の材料を蒐集し、又戦史地誌を編するの任に当り、勤勞少からず、居ること五年にして、大に海に関する知識を得、明治二十六年時局に鑑み日本経済会が賞を懸けて天下に日本海運論を募集するや、君直に之に応じて優賞を得、其該博なる識見と流麗なる文とは大に世の喝采を博せり、当時三菱及び郵船会社の重役等は深く其英材に屬望し、三十年遂に郵船会社に拉し来り、日露戦争には大阪支店の助役として功あり、三十九年本店に歸りて監督課助役として其職に尽しつゝあるの傍ら慶應義塾大学理財科の海運業に関する講義を担任す、四十三年春日本戦後の経営と題して大阪朝日新聞一万号の記念懸賞に当選したるは、君の対外商工策なりき、別に海軍振興論、海事総覧等の著あり、海に関する知識の博大にして深遠なる当代無比と称せらる。

この中に記された寺島の著作についての情報に基づきに検討する。

4. 著作等

寺島の著書にはつぎのものがある。

1. 『海軍振興論』伴正利(発行人)明治23年(1890年)著者名明記なし 奥付に「非売品」とある。前掲『実業家人名辞典』が同書を寺島の著作と記す。
2. 『兵商論』伴正利(発行人)明治24年(1891年)、著者名明記なし、奥付に「禁売買」とある。寺島の著作と推定する根拠は後述。
3. 『日本海運論』日本経済会 明治27年(1894年)、日本経済会懸賞論文。
4. 『帝国海事総覧』共益商社 明治33年(1900年)。
5. 『対外商工策』宝文館、明治41年(1908年)、大阪朝日新聞社懸賞論文。
6. 『海運政策』海軍経理学校 大正12年(1923年)、海軍経理学校講義、防衛研究所・海事図書館・

神戸大学「渋谷文庫」の三か所に残る。

7. 『帝国海運政策論』巖松堂書店 大正12年(1923年)、博士論文。
8. 『交通政策』文信社、昭和2年(1927年)、東京帝大経済学部講義。

翻訳書としては、アルフレッド・セイヤー・マハン著、水交社訳『仏国革命時代海上権力史論 下巻』東邦協会、明治33年(1900年)が、海軍編修書記内田成道との共訳となっている。

大正6年(1917年)に論壇に登場以後は『外交時報』掲載の論考など数多いが、初期の海軍在職当時のもものとしては、「海運ノ振興ト巡航商船ノ制」(水交社記事49、明治27年)、「海事思想涵養の方法」(大日本教育会雑誌163、明治28年)が確認されるだけである。

5. 筆名での活動

一方、寺島には筆名「Q.S.T.」を用いた活動があった。『兵商論』が明治24年(1891年)7月に発行された直後の8月から9月にかけて、同文が「Q.S.T.」からの特別寄書「兵商論」として雑誌『国民之友』に転載された。10数年後、帝国海事協会の機関誌『海事雑報』186号(明治37年3月)、190号(同37年7月)~220号(40年1月)に「Q.S.T.」名で、海外の海軍・海事に関する時事ニュースの紹介を連載した。寺島は、明治26年刊『日本海運論』141頁、および、明治27年の「海運ノ振興ト巡航商船ノ制」冒頭において、『兵商論』を自分の著作であると述べていた。海軍将校の親睦研究団体・水交社の機関誌『水交社記事』の編者である肝付兼行(海軍大佐、水路部長)、沢鑑之丞(海軍大技士、軍務局二課課僚)が閲読済みの誌面での発言である。『兵商論』の著者が寺島であることは海軍内部では周知の事実であり、後年、帝国海事協会機関誌に登場した「Q.S.T.」が寺島であることも推測可能な事項であったと思われる。なお寺島は、明治44年(1911年)刊『対外商工策』の「自序」に「Q.S.T.生」と署名し、自分

がかつて用いた筆名の主であることを，当時の読者階層に示した．

6. 海軍内刊行物

海軍に奉職中の職務を窺わせる『軍備論集』1号・2号・3号が防衛研究所に残る．明治23年（1890年）から明治24年（1891年），第1議会を間に挟んだ時期の新聞，雑誌に掲載された陸海軍備に関する論考，記事を集めた冊子であり，合冊製本されて海軍省「中央文庫」の朱印が捺してある．寺島が起草した『海軍振興論』と『兵商論』は，議員や記者に配布する海軍の広報パンフレットであり，一方，如何なる軍備論を組み立てるかを検討するための内部資料が『軍備論集』であったと推測される．『海軍振興論』および『兵商論』の発行人・伴正利は水路部を明治21年（1888年）に少佐で定年退職した予備役軍人である．政治的主張の著書を海軍自体が発行するわけに行かないので退職者を名義上の発行人にしたと推測される．国立公文書館所蔵「官吏進退・明治二十一年官吏進退八・海軍省二」（請求番号，本館-2A-018-00・任A00174100）に，明治21年6月1日付「海軍少佐伴正利依年齢満限退職被命ノ件」が残る．

なお『軍備論集』1号が，別に，東京大学総合図書館に伝わる．呉鎮守府長官であった中牟田倉之助に配布され，関東大震災後，中牟田子爵家から東京帝大へ寄贈されたものである．